

優秀修士論文概要

エジプト・ナカダ文化の副葬土器研究

—— マールクレイ胎土土器の生産・流通からみた
地域統合 ——

伊藤 結華

はじめに

古代エジプトのイメージと強く結びつく手厚い埋葬習慣の萌芽は、ファラオの誕生に先立つ先王朝時代(紀元前四四〇〇年頃から紀元前三一〇〇年頃)、エジプト南部を発祥とするナカダ文化に認められる。先王朝時代の埋葬では、最も一般的な副葬品が土器であり、膨大な量の研究資源を蓄積してきた。そして、王朝成立を知る手がかりとしても研究されてきた。

一つの画期として捉えられているナカダⅡC期を特徴付けるのが、マールクレイ胎土土器という新しい土器が急速に広域分布を示すようになることである。従来とは異なる技術体系を導入し、高い装飾性と硬質な焼き上がりを実現したこの土器は、家内生産規模で自発的に成立したとは考えにくく、エリート層の需要によって生産が始められ、その後も生産・流通にエリート層のコントロールがあったことが想定されている。そこで修士論文では、仮説として、マールクレイ胎土土器を取り巻く様相が、地域を横断して齊一的に切り替わるのではないかと考えた。そしてその変化の背景を、地域統合の文脈で論じることを目的とした。

1. 先行研究と問題点

先行研究のまとめとして、先王朝時代の地域統合研究と土器研究を整理した。地域統合については、文化的統合と政治的統合の二本立てで、国家形成プロセスを復元しようとしてきた。前者は考古学的事実からアプローチが可能であり、バダリ地域・アビュドス地域・ナカダ地域・ヒエラコンポリス地域という四つの小地域区分が提示されている。先王朝時代中頃(ナカダⅡC期からⅡD期)にみられる四地域間での物質文化の均質化が、統一王朝成立の前提として特に重視されてきた。ただ、均質化につながる情報伝達を可能とするのは、地域間のネットワークである。先王朝時代中頃から、どのように集落間、地域間が結びついていたのだろうか。

既往研究では、南レヴァントやスベアとの長距離交易網などマクロな視点での分析が進められてきたが、上エジプト内部における物流などは対象になりづらかった。そのため、副葬土器組成や土器製作技術の地域的まとまりを提示するにとどまり、土器動態の背景にある、国家形成にむかう当時の広域のかつ流動的な社会状況を捉え切れていなかったのである。

マールクレイ胎土土器は、生産拠点が不明なものの、広域分布を示している、実際に土器が移動したこともわかってきた。そして、土器自体の装飾性や、希少な内容物の貯蔵・運搬という用途が想定されているため、分析対象として選択した。

2. 研究方法

対象時期は、ヘンドリックスが設定した広域編年を用い、ナカダⅡB期、ⅡC期、ⅡD期、ⅢA期とした(Hendricks 1989, 1996, 2006)。上下エジプト、および先行研究で示された四つの小地域区分に沿って検討を行うこ

とした。その結果、既存の報告に基づいて、一六遺跡、合計二二四一点の土器が分析対象となった。分析に先立ち、皿類、碗類、鉢類、ビーカー類、壺類、長胴壺類の六つに分類している。

分析は二つ実施した。一つ目が、器種構成の時空間的分布の分析である。時期ごとに器種構成と、どの器種が彩文や把手と組み合わせるかを分析し、時期変遷を提示した。つづいて、遺跡単位と小地域単位の器種構成を分析し、比較を行なって地理的分布状況を明らかにした。ここで、ⅡC期からⅡD期の下エジプトの遺跡の分析結果との比較を行い、マールクレイ胎土土器の流通について検討した。二つ目が、器種と彩文モチーフの組み合わせを傾向の分析である。彩文との相関が認められた器種全てからモチーフを抽出し、分類を行った。つづいて彩文モチーフの情報を加えた上で器種構成の時空間的分布を明らかにし、無文との相違点も検討した。

考察ではこの2つの分析結果を照らし合わせて画期を見出し、その背景を論じている。

3. 分析結果

分析1

上エジプトの器種バリエーションはⅡC期とⅡD期の間をさかいに、次第に増加していく。時期が下るにつれて器種構成の共有度は高まっており、土器の流通あるいは情報の伝播が緊密化していくことがうかがえた。下エジプトでは資料数が少ないため断言はできないが、上エジプトの器種構成の範囲内、かつ中心的な器種の割合が大きい傾向を示した。

器種構成を共有する空間的なまとまりは、概ね先行研究の小地域区分と重なる。ただし、類似する器種構成を示す地域内でも、装飾を有する壺類・長胴壺類の点数と割合、各器種の有無によって差異が見られた。とくにア

ビュドス地域内でこの差異が大きく、ⅢA期になるとナカダ地域とヒエラコンポリス地域でも顕著になることが判明した。

波状把手を有する土器は、通時的変化がもつとも顕著だった。上エジプトでは、壺類のなかで器形に地域的多様性があったが、ⅢA期になるとビーカーに収斂することが示されたのである。また、下エジプトではビーカーと併行して長胴壺も存在しており、伝統的な見方である、波状把手付土器の一元的な器形変化を否定する結果となったことが重要といえる。

分析2

抽出した彩文モチーフは全二七種類であった。ⅡD期までは、器種と彩文モチーフの組み合わせに相関が認められ、ⅡB期から続く石製容器の模倣ないし幾何学モチーフの系統と、ⅡC期から始まった船型モチーフを中心とする形象モチーフの系統の二つが存在し、分布の様相がそれぞれ異なることが判明した。また、二系統ともナカダ遺跡とアムラ遺跡に分布が集中し、船型モチーフはナカダ遺跡、動物型モチーフおよび区画格子は特にアムラ遺跡で生産されていた可能性が指摘できた。

ⅢA期になると彩文土器生産が転換し、ⅡD期までの系統が断絶する。

彩文土器の半数以上がビーカー類となった。分析1で検討した、マールクレイ胎土土器全体の器種構成においても、ⅡD期まで隆盛した波状把手を持つ有頸壺がビーカー類に収斂し、全体に占める割合が大きくなるということが判明している。つまり、彩文土器生産自体が、ビーカー類生産への集約化に取り込まれたと推測できる。彩文モチーフは、より簡略的な幾何学モチーフのみとなり、ヒエラコンポリス地域を除く三地域で展開することが認められた。

4. 考察

二つの分析結果から、ⅡB期とⅡC期の間、ⅡD期とⅢA期の間に画期を見出すことができたため、マールクレイ胎土土器の生産と流通の変遷を三段階で整理した。

①生産開始期（ⅡB期）

アビュドス地域では墓が一定数検出されているにもかかわらず、一点も認められなかった。バダリ地域・ナカダ地域間の直接的な交流が示唆される。

②展開期（ⅡC—ⅡD期）

アビュドス遺跡に波状把手付きの土器が集中し、かつ丸底長胴壺が創出される。ⅡC期からⅡD期にかけて、ナカダ遺跡を中心とした分布状況の地理的勾配が解消されており、アビュドス遺跡への集積が起こったと解釈した。また、器種構成の偏りからは、地域内での消費（副葬）を意図した生産体制が想定できた。

③集約期（ⅢA期）

ビーカー類と長胴壺類へ生産が集約化されたと言える。分布をみると、ヒエラコンポリス遺跡に点数が集中していた。ⅡD期まで分布の中心であったナカダ遺跡は、伝統を引き継ぐように、有頸平底壺の割合が高い器種構成を示した。当該期に大型墓が造営されるアビュドス遺跡では、分析対象とした一般的な墓のデータからは偏在傾向が見出せなかった。一方、各小地域の縁辺に位置する遺跡は、ビーカー類と長胴壺が中心とする器種構成になっており、紐帯強化を意図した、再分配的な生産・流通システムへ移行したと推測した。

つづいて、彩文土器の変化から、マールクレイ胎土土器の社会的な意義について検討を行った。まず、先学によって繰り返し指摘されてきた石製

容器と幾何学モチーフの彩文土器の関連性について、石製容器に使用される石材の画一化が、幾何学モチーフの彩文土器の衰退と結びつくことを新たに指摘した。形象モチーフの有文土器については、生産・流通という経済的な側面だけでなく、集団と結びつく文化伝統の衰退、すなわち物質文化の均質化という側面が認められることを指摘した。また、土器に描かれなくなったとしても、新たに出現した器物に系譜が連なること、さらにそれが権力を象徴するということが図像研究の分野で示されている。したがって、支配者が新たな価値体系を創出することによって、彩文土器の衰退が引き起こされた結論づけた。

まとめると、装飾性の高さによって土器自体に価値を持たせる生産のあり方は衰退し、副葬品のセットが共有される時代の幕開けが、ⅢA期の特徴と言えるのではないだろうか。こうしたⅡD期からⅢA期にかけての様相の切り替わりは、地域を横断する斉一的な現象だったと評価でき、マールクレイ胎土土器の生産・流通が、やはりエリート層のコントロール下にあったという仮説を支持するのである。

おわりに

マールクレイ胎土土器の時空間的分布状況を明らかにし、エリート層による生産・流通のコントロールという仮説に、より実証性を持たせることを第一に掲げ、検討を行ってきた。その結果、ナカダⅡD期からⅢA期にかけての様相の切り替わりは、地域を横断する斉一的な現象だったと評価することができ、生産・流通のコントロールの存在を浮かび上がらせることができた。そして、地域統合の文脈で論じるという第二の目的についても、政治的統合モデルにフィードバックすることによって達成できたと考える。

今後は、修士論文では欠けている実物観察を実施し、土器の移動についてより実証的に明らかにすることで、当時の社会の復元に寄与したいと考える。

引用文献

- Hendrickx, S. 1989. *De grafvelden der Nagada-cultuur in Zuid-Egypte, met bijzondere aandacht voor het Nagada III grafveld te Elkab. Interne chronologie en sociale differentiatie*. Leuven.
- 1996. "The relative chronology of the Nagada culture: Problems and possibilities", in A. J. Spencer (ed.), *Aspects of Early Egypt*: 36-69. London.
- 2006. "Predynastic-Early Dynastic chronology", in E. Hornung, R. Krauss, and D. A. Warburton (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*: 53-93. Leiden; Boston.